

オタマジャクシを、再度ビオトープへ

園のビオトープで発見したカエルの卵。その後の出来事や狙いを引き続き記してみましよう。



室内で変化を観察していたカエルの卵は、殻を割ってオタマジャクシが出てくるのではなく、その卵自体が形を変え、オタマジャクシへと変身していきます。いわゆる、その「変態」していく姿を観察した後、自然環境の話などしつつ、ビオトープへ戻しました。

「およいでる!」「かわいいね!」「げんきでね!」

**「ゴミを捨ててはいけません」とは教えていませんが、
野山にゴミを捨てるような大人にはならないんじゃないかなと … ♡**

ほかにも、新たな生き物を見つけると興味津々。面白いからこそ、本（図鑑）に食い入り、見つけると満足。そこでは、自ら手を伸ばし、知る事の喜び回路がひとつ満たされていることと思われます。これが、「主体的」に学ぶという狙いへの繋がりのひとつ。幼児期は、理屈より興味や好奇心を刺激し、そこから連鎖していく行動を様々な分野の学びへの意欲に繋げる、という狙いに対する方策をふんだんに取り入れたいものであり、「何故に“勉強しなさい”が必要のない子どもに育つんですか？」との質問に対する答えの一つでもありました。



実際には、教育環境の一端として機会を増していきたいと考えている自然環境教育は、「森のようちえん」の狙い同様に、それら要素の多様性と深さにカギがあると捉えられていて、そこには特にビオトープのながしを覚えさせたいわけではないのです。時期や天候にも左右され、随時変化を見せてくれる無作為的な事象に触れつつの学びの要素は、発達に関する脳科学的側面から考える幼児期教育に際しても効果的であり、それはもちろん、日常生活においても、園の行事やカリキュラム策定などにおいても、常に、脳の中で何を育みたいか、数量的な記憶ではなく思考的回路の育みをいかに促すかに視点を置いてみる事が、将来的に多様に活躍できる人材育成、つまり、非認知的能力を伸ばすための幼児期教育の質を高める要素となりうるカギへと繋がっていきます。

自然環境の豊かさに包まれ、触れることのできる機会の多い教育環境は、子ども達の育みに対して有効に役立つアイテムとして捉えられるでしょう。

学園長

学校法人野澤学園
東村山むさしの認定こども園 GROUP
<https://musashino-group.tokyo/>

